

多文化性の例示と異文化間理解への一歩 ——『パリ20区、僕たちのクラス』について、 日本人学生の反応とその分析——

竹本江梨

1. はじめに

「この講義を受ける前、[...]友達の旅行話や旅行番組によって私はフランス像を作り上げていて、パリは全区がシャンゼリゼ通りのような場所だとイメージしていた」

「フランスはおしゃれな街という偏ったイメージを持っていた私にとって、『憎しみ』で見た郊外における移民の若者達の姿は衝撃的であった」

上記は筆者が担当したある講義の後期試験における、学生達の記述を抜粋したものである。

大木(2014)によると、経済産業省と文部科学省による全体会議「産学人材育成パートナーシップ」の下に設置された「グローバル人材育成委員会」¹⁾の報告でも、また2012年に始まった文部科学省の「グローバル人材育成推進事業」の「中間まとめ」においても、外国語の能力はグローバル人材に必要な能力の一つに過ぎないとされ、求められる要素として言語運用能力以外に「異文化理解・活用力」や「異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティー」などが掲げられている。

「[...]文化的・歴史的なバックグラウンドに由来する価値観や特性の差を乗り越えて、相手の立場に立って互いを理解し、[...]相乗効果を

生み出して、新しい価値を生み出すことができる人材」

(グローバル人材育成委員会, 2010: 33)²

それをふまえ、大木(2014: 48)は「大部分の日本の学生に必要なのは、「偏見をなくし、お互いへの関心と寛容の精神をはぐくむのに貢献する」**異文化間能力**である」(太字筆者)と指摘し、筆者もその必要性を強く実感している。フランス語専攻の学生に関して言えば、たとえ大学の試験やTCF(Test de connaissance du français)、仏検(実用フランス語技能検定試験)などの語学試験で良い成績を取っても、フランスやフランス語圏諸国について旅行番組程度の知識やイメージから脱却できないようでは、グローバル人材育成という目標には程遠い。

本稿では現状の一例として、筆者の担当した講義の一部を紹介し、大学における異文化間教育の必要性和今後の展望について考察したい。

2. 講義の詳細

2.1 講義について・経緯

本稿で取り上げる講義は、愛知県立大学外国語学部ヨーロッパ学科フランス語圏専攻において、2014年度後期に行った「研究各論(フランス語学):メディアのフランス語」である。前期では、特にテレビ番組制作に関わる「放送翻訳・通訳」³という職業について学ぶとともに、フランス社会のごく日常的な話題(食習慣、趣味、出身など)を扱った基本的な文章や会話の聞き取り翻訳練習をし、後期ではテレビやラジオのニュース、新聞記事などの生教材を使用して、さらに翻訳・通訳の技術的な練習を重ね、メディアリテラシーなどの問題についても触れる予定であった。

しかし、前期で「引越し」をテーマにした会話の聴解翻訳を行った際、ほとんどの学生がフランスの郊外問題や若者の就職難などについて知らず、他の事情に関してもフランスの一般知識に乏しい印象を受けたため、当初の予定に加え、後期は翻訳・通訳練習とともに、現代フランスの重要な社会的側面として、「フランスにおける移民・人種問題」を取り上げるこ

ととした。そして、その様相を伝える素材として、6本のフランス映画を活用した。

2.2 現代フランス事情：なぜ「移民・人種問題」か？

2014年6月12日から7月13日にかけて、第20回FIFAワールドカップがブラジルで開催された。ある大学の講義日に優勝候補アルゼンチンの試合があったため、アルゼンチンが世界のどの地域にあるかと聞いてみたところ、「ヨーロッパ」と答えた学生が少なからずおり、別の機会には、北アフリカのアラビア語圏について書かれたフランス語の文章を読むため、「北アフリカも含め、アラブと言ったらどの国を思い浮かべるか？」と質問したところ、「インド」「アルゼンチン」など珍回答が続出した。

あくまでも口頭での質疑応答であるため、詳細は省くが、これらはフランス語専攻の2～4年生の学生を対象にした質問であり、学生の地政学的な基礎知識の欠落は深刻だとの印象をぬぐえない。

また、同年度、やはり口頭で「フランス人の容姿のイメージ」を尋ねたところ、70数名のうち少なくとも4分の3ほどの学生が「**金髪**」だと答えた。学生は2年生で、むろん、平成生まれである。

2014年9月29日～2015年3月28日まで放送された、NHK連続テレビ小説『マッサン』は「[…]日本のウイスキー誕生を支えた竹鶴政孝とその妻リタがモデルとなる“夫婦の奮闘記”」[NHK online: producer.html]であるが、実在したリタは濃い色の髪であったにもかかわらず、ドラマではエリーという名の**プラチナ・ブロンド**の女性として登場しており、それについて、The Japan Timesは2014年10月25日付で“Blondes have more fun in NHK’s morning drama” [The Japan Times online] という皮肉めいたタイトルの記事を掲載し、「**金髪碧眼**」が今なお日本人にとって「魅惑的な異国」を表すマークであると指摘している。

As for Rita’s hair color, that will remain a mystery, […] If you want to make

the most of the fact that the main character in a series famous for turning Japanese ingenues into stars is going to be a 28-year-old Caucasian woman, then you might as well go all the way and make her blonde, a feature that, along with blue eyes, still possesses a certain exotic cachet in Japan.

(下線筆者)

学生が『マッサン』を視聴しているかどうかは別にして、日本のメディアがこのような古い世界観で欧米のイメージを構築し続け、伝達している限り(たとえそれが視聴者の望む幻想だとしても)、平成生まれの学生も当然その影響を受け、今以て「外国人(=欧米人)は金髪」といったステレオタイプに囚われてしまう。これは懸念すべき問題であり、政府の推進するグローバル人材育成の政策とは相いれない。

学ぶべき現代フランス事情は様々だが、フランス語専攻の学生にとって、フランスの**多民族性や多文化性**の知識を学ばずして「**異文化間理解**」はない。

2.3 言語運用能力以外の要素

当初のシラバスから内容を変更したとはいえ、「メディアの翻訳・通訳について学ぶ」という講義の指針を変えたわけではない。実際、言語運用能力そのものを高める技術的な練習以外に、メディアの翻訳・通訳に欠かせない要素が少なくとも三つある。

- I. 国内・国際情勢への関心
- II. フランス社会の現代事情についての知識
- III. 情報のリサーチ力と理解力(情報収集、メディアリテラシー、ステレオタイプの問題など)

Iは、当然のことながら、「常に様々なニュースについてアンテナを張っ

ていなければならない」という意味である。竹本(2010)が2009年に名古屋外国語大学外国語学部フランス語学科の学生を対象に行ったアンケート調査では、好んで見る番組のジャンルについて、「報道番組」をよく視聴している傾向がうかがえた(男子学生1位、女子学生2位)。しかし、一体どの程度の関心を持って見ているのであろうか?また、国際情勢のみならず、国内のニュースにも常に関心を払うべきである。先に述べた文部科学省の「中間まとめ」に「異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティ」(太字筆者)と明記してあるように、異文化理解のためには、まず自分が何者かを知らねばならず、自国の状況についても同様である。

IIは「オーセンティックなフランスを知る」という意味である。駐仏日本大使を務めた経歴を持つ平林(2008: 9)は、「フランスは、自らが生み出すファッション・ブランド同様、輝いている。実態以上に輝いて見えると言ってもよい」と指摘し、青木(2003: 190)は**国家のブランド化**について、Peter Van Hamの論文(2001)⁴を取り上げ、「ブランドとは、一口に言えば、顧客や消費者がある製品に対して抱く発想である。ブランド国家とは、ある国家に対して、外部の世界が抱く理念である(訳 青木)」としている。

さらに、萩原(2007)が2006年に首都圏の13大学で行った調査によると、フランスは「おしゃれで」「文化が豊かで」「先進的な」国などとして捉えられ、同じく2006年にポータルサイトgooで集計発表された『フランスと言えば思い浮かぶものランキング』[goo online: france spot]の発表では、1位「エッフェル塔」2位「凱旋門」3位「ワイン」4位「ベルサイユ宮殿」5位「美術館」と続く。

萩原の調査はフランス語専攻の学生に限って行われたものではなく、gooのランキングも「gooリサーチ」のモニターに対してとられたアンケート、つまり一般ユーザーへの調査である。しかし、大学の講義や海外研修・留学などによって知識を得ているはずのフランス語専攻の学生は、ブランド化された「美しいステレオタイプ」のフランス以外に、はたしてフランスについて何を知っているのであろうか?

IIIは非常に重要なスキルである。今日、その豊富な情報量と利便性から、リサーチの主な手段としてインターネットが使用されているが、玉石混交の情報の中から取捨選択し(=メディアリテラシー)、既成のイメージに囚われない姿勢(=ステレオタイプの問題)が求められる。

また、IおよびIIについては、具体的な目的のために専門性を追求する場合を除き、広く浅い知識で構わないというのが筆者の見解である。専門知識があれば尚良いが、広い基礎知識とIIIのスキルがあれば、カバーし得ることも多い。言語運用能力と共に、I、II、IIIのような要素に重点を置かなければ、**大学教育の有益性**に疑問が生じる。なぜなら、大学を卒業してすぐフランス語の翻訳者・通訳者として仕事をすることは多くの学生にとってあまり現実的ではないが、I～IIIの知識やスキルは、幅広い範疇でグローバル人材の基礎力となり、役立つことが考えられるからである。

2.4 学生について

講義を履修した学生は7名である。数は少ないが、その分、質疑応答や意見交換に時間を割くことができ、細かい点にも注意を払えたことは非常に有益であった。詳細は以下のとおりである。

- 人数：7名（内訳：4年生2名、3年生4名、2年生1名。全員女子）
- 前期から継続して履修している者：5名（4年生1名、3年生4名）
- 後期から新たに履修した者：2名（4年生1名、2年生1名）
- 旅行・留学・海外旅行の有無（延べ数）：
 - ・旅行：5名
 - ・短期留学：4名 長期留学：1名
 - ・（留学以外の）長期居住：1名
 - ・フランスの移民・人種・宗教問題について、他の講義で学習している／学習したことがあるか？ ある：4名

結果として、やはり2年生と4年生および長期留学経験者と経験のない学生との間には、映画における各場面の状況や登場人物についての理解力、関連情報のリサーチ力などに差が見られたが、個人の趣味(漫画の愛好者、映画や美術に興味があるなど)および大学入学以前の経験(どんな中学・高校に通っていたかなど)によっても、一つの質問に対してまったく逆の答えが寄せられるなど、非常に興味深い事例が見られた(詳細は後述)。

2.5 講義15回全体の概要

主な作業

- ニュース記事の翻訳(添削・返却された課題を授業で復習)
- 翻訳記事と同様のトピックで通訳練習
- 映画鑑賞および課題(各自、授業外で映画を鑑賞し、課題を提出。添削・返却された課題を授業で復習し、教員が補助プリントを参考に解説しながら、各学生の意見を紹介し、学生と質疑応答)

これらの作業は一コマの授業の中ですべて行われたわけではない。「翻訳記事の復習+映画」もしくは「通訳練習+映画」といった組み合わせを主としたが、時間調整のため、映画関連のみの授業も1~2回程度あった。

副次的な作業

- イスラム国(IS)についてのリサーチ
- フランス連続テロ事件(シャルリ・エブド襲撃事件等)の解説

本稿の講義は2014年10月3日に始まったが、当時、世界で最も大きな関心を集めていたニュースは「イスラム国(IS)」であった。とりわけ、「欧州で生まれ育った移民二世・三世の若者が数多く渡航し、イスラム国に参加している」という事実が国際社会は大きな衝撃を受け、注目が集まっていたため、フランスの移民問題への導入として、このトピックを扱った。

また、2015年1月7日および9日にはフランス連続テロ事件が発生し、計16名⁵が犠牲となったが、犯人、容疑者（実は事件と無関係）、犠牲者、救助された人質の中に、マグレブ系・黒人系のイスラム教徒が混在し、「メディアアリテラシー」および「否定的ステレオタイプ（偏見・差別）」の問題を扱う上で無視できないトピックであったため、急遽、取り上げた。

3. 映画について

3.1 映画の活用

小林・寺田・中井（2014）は、映画を活用した大学の授業の特徴について調べ、国内外の授業実践論文を比較分析している。それによると、抽出した国内論文59本のうち、46本が「語学教育」に関する論文であり、次に多いのが「異文化理解教育」の4本である。

学問領域	本数	
語学教育	46	(78.0%)
異文化理解教育	4	(6.8%)
教養教育	2	(3.4%)
医学・看護学	2	(3.4%)
政治学	2	(3.4%)
教育学	2	(3.4%)
物理学	1	(1.74%)

表1 映画を教材とした授業に関する日本語による論文の数
(小林他, 2014)

そして、映画を用いた授業実践の学習目標には大きく2種類あるという。

第1に、特定のテーマについて理解させることを目標としているものがあつた。[...]たとえば他国の文化・生活習慣等を伝えるために映画が使用されている。[...]第2に学生の推論力や思考力を育成すること

を目指した授業実践があった。

その中には「映画の場面設定を学生に分析させる」「ストーリーを発展させ、登場人物について仮定を立てる」「映画の視聴を通じて学生に問題を実感させ、感情を引き起こしたうえで、生命倫理について考えさせる」など、様々な試みがあり、筆者と共通した映画活用の動機を見出すことができる。

3.2 目的と注意点

映画活用の目的は、学生にいくつかの具体例を示しながら、以下のようなフランスの社会的側面を認識し、それについて考えてもらうことである。

- フランスには多くの移民とその家族が暮らしている。
- その移民に対し、人種・宗教といった様々な要因に基づく偏見と差別がある。
- 移民とはどんな人達か？偏見・差別とは何か？

その際、あくまでも「語学と並行して知っておかねばならない基礎知識を得る」という観点から、専門的な詳細には入らない。フランスにおける移民への偏見・差別は、とりわけアフリカ黒人⁶やマグレブ系（アルジェリア、モロッコ、チュニジア）に対して強く、そこには奴隷貿易や植民地支配といった歴史的要因も強く作用している。しかし、講義では要因そのものを深く掘り下げることはせず、関連を示す程度にとどめた。また、注意点として、次の二つを特に意識させるよう心がけた。

- 映画はフィクションである。
- 多くの場合、場面や登場人物の設定は「ステレオタイプ」である。

これは情報リサーチに欠かせない「メディアリテラシー」にもつながる要点である。移民や人種問題を扱ったフランス映画には一定の傾向があり、たとえば「移民の若者」を象徴するイメージ(=映像)として、「*cit  *シテ(低所得者が多く住む郊外の集合住宅)」「昼間からたむろする若者グループ(男のみ)」「町なかの落書き」「ラップ」「マリファナ」「**RER**(パリと郊外を結ぶ電車)」「父親不在で子供の多い家庭」(順不同)などが挙げられる。それらは必ずしも現実世界からかけ離れたものではなく、現実を基に映画を製作しているはずなのだが、時には「映画やテレビに影響されて構築された現実世界を見ている」感覚もあり、鶏と卵のように判断が難しいこともある。しかし、重要な点は「映画は、明確な意図の下、人によって製作されたもの」だということである。映画は参考資料としては非常に有効になり得るが、それが持つエンターテインメント性と、経済的な興行成果を期待された「作品」であることを忘れてはいけない。その点を常に学生に意識してもらおうよう心がけながら、授業を進めた。また、映画の選択に関して、「移民・人種問題」というテーマの下、映画の内容が暗いものばかりにならないよう、注意を払った。

3.3 使用した映画⁷

使用した映画は以下の6本である(鑑賞順)。授業の全体的な内容把握のため、各映画の概略を紹介する。

①『最強のふたり』(原題: *Intouchables*)

2011年フランス(2012年日本公開)

監督・脚本: エリック・トレダノ、オリヴィエ・ナカシュ

出演: フランソワ・クリュゼ、オマール・シー他

内容: 実話を基に、首から下が麻痺した大富豪の中年男と、ひよんなことからその介護人となった移民地区出身の黒人青年が、互いの境遇の差を乗り越えて、真の友情を育んでいく姿を描いたヒューマン・コメディ。

② 『デイズ・オブ・グローリー』 (原題: Indigènes)

2006年フランス、アルジェリア、ベルギー、モロッコ (大阪ヨーロッパ映画祭2007年出品作品、日本劇場未公開)

監督: ラシッド・ブシャール

脚本: ラシッド・ブシャール、オリヴィエ・ローレル

出演: ジャメル・ドゥブーズ、サミー・ナセリ、ロシュディ・ゼム他

内容: 第二次世界大戦中、ドイツ軍に苦戦するフランス。植民地アルジェリアから仏軍に参加したアラブ人兵士達は、戦地で厳しい差別にあう。同じ敵と戦いながら、報われることのなかった兵士の存在を描いた傑作。

③ 『パリ20区、僕たちのクラス』 (原題: Entre les murs)

2008年フランス (2010年日本公開)

監督・脚本: ローラン・カンテ

原作・脚本: フランソワ・ベゴドー (原作『教室へ』 フランソワ・ベゴドー著 早川書房)

出演: フランソワ・ベゴドーおよび地元の中学生達他

内容: 様々な民族が暮らすパリ20区。スラングに馴れ、何かと反発する24人の個性的な中学生達と、彼らに真正面から向き合い、次々と問題が持ちあがる中、奮闘する担任教師フランソワとの一年。

④ 『憎しみ』 (原題: La Haine)

1995年フランス (1996年日本公開)

監督・脚本: マチュー・カソヴィッツ

出演: ヴァンサン・カッセル、ユベール・クンデ、サイード・タグマウイ他

内容: パリ郊外の移民地区で若者の暴動が発生し、ある黒人青年が警官に撃たれ重体に。サイード、ヴィンス、ユベールは病院に見舞いに訪れ

るが…。三人の移民系青年の一日をリアルに描いた作品。

⑤ 『サンバ』 (原題: Samba)

2014年フランス (2014年日本公開)

監督・脚本: エリック・トレダノ、オリヴィエ・ナカシュ

出演: オマール・シー、シャルロット・ゲンズブール他

内容: フランスで真面目に働きながらも、国外退去の窮地に陥ってしまった移民希望の青年サンバと、彼を支援する人々との人間模様。移民の厳しい現実を描きながらも、心温まるコメディ・ドラマ。

⑥ “Qu’est-ce qu’on a fait au Bon Dieu?”

2014年フランス (日本未公開)

監督: フィリップ・ド・ショヴロン

脚本: ギイ・ロラン

出演: クリスティアン・クラヴィエ、シャンタル・ロビ他

内容: 地方に住む裕福なヴェルヌイユ夫妻。敬虔なカトリック信者だが、4人娘のうち3人は異教徒の移民と結婚。そして、四女が選んだ青年は…。人種や宗教、偏見をユーモアたっぷりに描いたヒューマン・コメディ。

このうち、①～⑤は全編鑑賞し、⑥は日本語字幕がないため、あらすじを紹介した後、一部のみを授業で鑑賞した。また、⑤のみ冬休み中に劇場へ見に行くよう学生に指示し、他はすべて各自によるDVD鑑賞である。

各映画によって鑑賞後の課題の内容が違い、学生の回答はそれぞれ示唆に富んでいるが、本稿ですべての事例を紹介することは難しいため、当初の予定よりも長い時間を割くこととなった『パリ20区、僕たちのクラス』を取り上げる。

3.4 『パリ20区、僕たちのクラス』について：学生の反応とその分析

先述の映画①『最強のふたり』は現代の話だが、個人間の交流を描いたものであり、②『デイズ・オブ・グローリー』は第二次大戦中の兵士の話である。それに比べ、③『パリ20区、僕たちのクラス』は現代のパリの公立中学校が舞台で、日本の中学2年生にあたる子供達から教師や保護者といった大人まで、様々な背景を持つ登場人物が現れる作品であり、「移民・人種問題」という**現在のフランス社会の一側面**をかなり忠実に反映している。学生は映画を鑑賞後、課題として次の設問に記述式で回答・提出するように指示された。

1番 この映画の原題《Entre les murs》とは（一般的なフランス語として）どんな意味か。また、映画のタイトルとして何を表していると思うか、述べなさい。

2番 このクラスは中学校の「4年3組」である。日本の中学何年生にあたるか、調べなさい。また、なぜ「4年」生なのか、日仏の教育制度の違いをふまえて説明しなさい。

3番 このクラスの生徒と日本の中学生（映画と同学年）を比較してどう思うか、述べなさい。また、特に印象に残った生徒は？（名前が分からない場合は、どんな生徒だったか説明すること）（太字筆者）

4番 教師について、気付いたことを述べなさい。

3.4.1 作品に描かれたクラスについての印象

上記の質問のうち、ここでは特に3番の回答を取り上げたい。クラスには白人系、黒人(アフリカ系とカリブ系)、マグレブ系、アジア系と様々な生徒がおり、何かにつけて発言が多く、教師への反応も激しい。常に「反

抗」というわけではないが、決して素直ではなく、一つの学習活動をするにもかなりの時間と労力がかかる。その様子について、学生7名の反応はおおよそ次の三つに分かれた。

- 日本の中学に比べて劣る：5名
- 日本の中学と似ている：1名
- 日本の中学とは異なる：1名

「日本の中学より劣る」印象を受けた学生の回答例は次のとおりである。
(下線筆者)

- A) (日本では)ほとんどの学校では生徒はまじめに授業を受け、部活との両立をがんばりながら、受験生になるための準備をしている印象である。映画の生徒は学校に対して攻撃的な印象を受けた。
- B) 日本に暮らしていて、授業中に私語をせず、落ち着いて授業を聞くということが当たり前のことのように思っていた[...]授業以前の問題が多く、少しレベルが低いように感じた。
- C) 日本の生徒に比べ、先生にかなり反抗的で良くも悪くも発言が多く、全体的に心がすれている感じを受けた。
- D) 明らかにこのクラスの学生の方が騒がしく、先生に対して反抗的な態度をとっており、はっきりと意見を言っている。このクラスに比べると日本の中学生はおとなしいと思う。
- E) 教師にすぐ突っかかり、教科書の音読にさえ反抗したり、着席しなかったり、授業を中断させたり、日本の中学生はあまりそういうことはしない気がするし、少なくとも私の中学時代にはそういう生徒はいなかった。(順不同。内容は変えずに加筆)

このうち、Aの描写は、個人的な中学時代の経験を日本の中学全体に「一

般化」していると考えられる。また、Cの「心がすれている」という記述は、映画全体ではほとんどの子供達が、反抗しながらも、明るい学校生活を送っている様子であったことがあまり心に残らなかったようである。それとも、単に「心がすれている」という日本語の使い方の問題なのか、判断がつかかねるが、もし前者なら、「中学生はこうあるべき」という**規範的な先入観**から外れている状況を寛容には受け取れず、全体を見誤ってしまった可能性もある。それに対してD、Eは多少なりとも客観性を保っているように見受けられる。特にEの「少なくとも私の中学時代にはそういう生徒はいなかった」という記述は、個人の体験を一般論に広げない慎重な姿勢が見える。これらの意見に対し、「日本の中学と似ている」と答えたFの回答が興味深い。

F) 日本の中学生と非常に似ていると思った。私の通っていた中学校が荒れていたからかもしれないが、私の中学校も、この映画のクラスのよ
うに、教師が来てもしゃべり続けたり、後ろの席には全く授業を受け
ずにゲームや音楽を聞いていたり[...]。やはり、フランスでもこの時期の子供はととても多感で、[...]教師は一生懸命指導するが、それがまた子供にとっては腹が立つことでもある。そのような所が日本の中学生と比較して、とても似ていると思った。

一見、先述のAとは完全に逆の意見である。しかし、重要な点はその差ではない。むしろ注目すべきは、AとFの共通項、すなわち「自分の中学」=「日本の中学」という**短絡的な一般化**をした上で、作品のクラスとの対比を行っている点である。Fは偶然にも個人の経験と一致したため、類似として受容しているが、AもしくはCの記述は、**ジェンダー・ステレオタイプ**に見られるような**規範的ステレオタイプ**に通じるものがある（例：男／女はこうあるべき⇒中学校／中学生はこうあるべき）。

[...]ジェンダー・ステレオタイプには規範的な意味合いが含まれるため、ステレオタイプに合致しない行動は否定的に評価される。

(坂田,2014: 99 下線筆者)

通常、**ステレオタイプ**とは社会的に共有された固定的な観念であるため、個人の思い込みとは区別される。しかし、**異文化間理解**という観点に立ち、上記の一般化およびそこに内包される規範的ステレオタイプを「中学校」から「国、民族、宗教」などのキーワードに置き換えてみると、大きな問題の芽となる可能性を秘めてはいないだろうか。

一方、Gは優劣の比較ではなく、このクラスと日本の中学生は「異なる」という表現を使い、異質性そのものに注目している。

G) 教師に対する対等性という点で、このクラスの生徒は日本の中学生と大きく異なると思った。教師の言うことは原則従うものだという日本の中学生とは違い、教師の言うことでも自分が納得しなければ従わないという姿勢がとても新鮮だった。(下線筆者)

細川 (1997: 3 カッコ内 加筆) によると、

(母語教育では、無自覚に加入した社会成員性を強固にするとともに客観的観察力を養うが) [...]これに対して、第2言語教育がめざすのは、すでに獲得されている社会成員性に対して、異なる社会のありようを理解し、その社会に適応することを目的とする「対立的二重性」である。

つまり、政府や大学が目標として掲げている「**異文化適応力**」はいくつかの基礎要素の上でこそ成立するものであり、その一つが「**異文化間理解**」である。そしてその初期段階にあるものが「**差異の認識**」であり、優劣の

判断ではないことを、大学教育において明確にすべきである。

3.4.2 作品中の生徒の印象（エスメラルダ）

「特に印象に残った生徒は？（複数可）」という問いで、7名中5名がエスメラルダ（Esmeralda Ouertani）を挙げた。非常に弁の立つ女子生徒で、「ああ言えば、こう言う」タイプである。態度も群を抜いて生意気なため、印象に残るのは当然であり、「とにかく生意気」「自分の非を認めずに、へ理屈を述べる」「見ていてイラついた」などの意見が多かった一方、1名のみ、彼女の頭の良さや正義感の強さに言及した学生がいた。

H) […]この生徒は常に教師に対して反抗的で、模範的な生徒ではないものの、彼女の言うことはどこか理にかなっているもので、頭のいい生徒だと思った。（下線筆者）

実際、作品中では、状況設定やセリフに彼女の長所がはっきりと表れている。たとえば、自己紹介文の発表では「(将来は) 婦人警官になりたい。警官は悪い人間ばかりだと聞いているから、一人くらい、いい人間がいなければならない」と言い、度の過ぎた態度の生徒や担任の失言には手厳しい。また、夏休み前の最後の授業で「この一年間でどんな本を読んだか？」と聞かれ、「(大学生の姉が持っている) プラトンの『国家』を読んだ」といい、担任を驚かせる。これは映画の総まとめのシーンでもあり、非常に印象深いはずである。

ところが、エスメラルダについて批判的な記述をしていた4名の学生は、驚いたことに、誰も上記のセリフや場面を覚えていなかった。エスメラルダの第一印象が著しく悪かったため、記憶に残らなかったのであろうか。目立つ言動ばかりに気を取られ、登場人物の本質を見過ごす傾向は、インターネットやテレビなどによる情報収集においては、**メディアリテラシーの欠如**につながるものである。

3.4.3 作品中の生徒の印象（スレイマン）

しかし、生徒の印象に対する学生の記述で最も考えさせられたのは、エスメラルダについてではない。スレイマンである。スレイマンは黒人（アフリカ・マリ系）の男子生徒で、学校には教科書を持たずに登校し、教室にいても授業には参加する気がなく、担任以外の教師の評判もすこぶる悪い。しばしば激情に駆られてトラブルを起こし、ついには担任との言い争いから、はずみで女子生徒にケガを負わせてしまい、退学になる。彼の個性と、「フランスでは義務教育でも退学になる」という日本との大きな差異が際立つ状況設定にもかかわらず、「印象に残った生徒」にスレイマンを挙げた学生は、ゼロだったのである。

そこで、学生に新たな設問をした。

5番 なぜ自分にとってスレイマンは印象に残っていなかったと思うか。もしくは印象には残っていたが何も言及しなかったと思うか。述べなさい。

まず、どちらかを選んでから、記述してください。

1. スレイマンはあまり印象に残っていなかった。
2. 印象には残っていたが、なぜか課題では触れなかった。

学生の回答は以下のとおりである。

- (1) 印象に残っていなかった：2名
- (2) 印象には残っていたが、課題では触れなかった：5名

まず、(2) を選択した学生の記述を以下に示す。

- I) スレイマンの退学問題は映画の後半のメインであり、とても重要な

役柄であるとは感じていた。しかし […]エスメラルダの表面的なパフォーマンスばかりに目がいき、彼女の印象の方が言及しやすいと感じた。

- J) スレイマンは確かに劇中目立っていたが、あまりよい印象がなく触れにくかった。正直、自分とは違う世界を生きていた[…]無意識に、できたらあまり関わりたくないと思ったのかもしれない。[…]スレイマンは危険だと思い込んでいたのかもしれない。
- K) […] (女子生徒にケガをさせたシーンは印象に残ったが) 中学から退学させられてしまったことは、強くは印象に残らなかった。おそらく […]、黒人社会では途中で退学になってしまう子供が多いというイメージを持っていたために、よくあることだと感じ、あまり問題視しなかったのだと思う。
- L) 彼は問題が多く、他の生徒のように端的に文章にすることができなかった。また、誰かがスレイマンについては書くだろうと思い書かなかった。
- M) スレイマンにはどこかやさしさがあって憎めないのも何も言及しなかった。キレることでしか反抗できないからどうしても教師の目につき、もっと容量のいい生徒なら他の言い方で退学もないのに、とスレイマンに助言したくなった。

(順不同。内容を変えずに加筆。太字・下線筆者)

ここで注意を引くのは、5名中3名が「スレイマンには言及しにくい」「関わりたくない」といった主旨の回答をしていることである(下線箇所)。そして、その原因ではないかと推測されるのが、彼の人種的な特徴(アフリカ系黒人)とそれに対するステレオタイプのイメージではないだろうか(太文字箇所)。実際、Kは彼が「黒人」であることが自分の思考に影響した可能性に触れている。

Dubois (2012: 111-112) によれば、フランス映画における黒人の登場人

物は、次のような役割に限られるという。

- ① アンクル・トム⁸のような、子供や世話のかかる大人の良い友達になるタイプ。またはその女性版ともいえる乳母タイプ。
- ② 活気に溢れたいたずらっ子、あるいはそのような大人。
- ③ 人を笑わせ、ダンスがうまい。
- ④ 移民。大都市の郊外などに住む不良タイプも含む。(訳筆者)

つまり、これらはフランス映画における**黒人のステレオタイプ**であり、スレイマンは④に近いイメージである。ただし、この講義を受けていた学生達は「(講義以前に) フランス映画をあまり見たことがない」と言っていたため、ステレオタイプの影響を受けているとすれば、それはおそらくアメリカ映画やテレビの報道である。

上瀬(2002: 33)は「**少数派**であること」が**ステレオタイプや偏見の原因**になりやすいと指摘する。

一般に、少数民族には否定的なステレオタイプや偏見が抱かれやすいのですが、これは少数派の一部が目立つ行動(とくに社会的に望ましくない行動は目立ちやすい)をすると、その行動と所属集団が関連づけられてしまう錯誤関連のためと解釈できます。

社会心理学において、否定的ステレオタイプをもたらし属性(人種、民族、宗教、身体的特徴など)は「**スティグマ**」と呼ばれるが、スレイマンは「黒人」というスティグマのために、学生からは「別世界の人間(＝関わりにくい／関わりたくない人物)」として判断されたのではないだろうか。

その可能性を逆の方向から示唆しているのは、「スレイマンは印象に残らなかった」と答えた2名の学生である。

- N) スレイマンは […]、日本人から見ると馴染みのある典型的な不良というイメージがあり […]、他の生徒と比べあまり印象に残らなかったのではないかと思う。それは、日本の不良を扱った漫画やドラマの多くには、家庭の事情が複雑で、いつも教室の後ろに座っていて、授業に消極的で、他の子より大人ぶりたいといった不良が登場するからだ。(日本人でも、不良を扱った作品をあまり見ない人はそう思わないかもしれない)
- O) スレイマンは[…]、実際に彼の人物像を考えると、どこにでもいるような反抗期の少年だと思った。問題行動よりも、自己紹介の宿題で写真を使い家族の紹介をする、まだ幼い部分や素直な部分の方が印象に残った。[…]彼自身に特別問題があったわけではなく、彼をとりまく環境に問題があったと感じたので、スレイマンはあまり印象に残らなかったのだと思う。(下線筆者)

この二つの回答の共通点は、スレイマンを「典型的」「どこにでもいる人物」(下線箇所)として捉えていることである。つまり、そこには「**黒人**」という**少数派のステイグマ**は存在しない。漫画やドラマ、もしくは現実社会でよく見かけるような「身近な存在」と判断されたため、印象に残らず、言及されなかったのだと分析できる。

このように、スレイマンという一人の黒人少年について、表面上は「7人の学生全員が何もコメントをしない」という同一の様相を呈したが、その理由は異なることが確認された。特に、「(よくいるタイプで)印象に残らなかった」場合と「(印象には残ったが)異質な者に対して距離感や偏見を持つ」場合のどちらも“ノーコメント”という同様の形で表れたことは興味深い。

映画に対する学生の反応について締めくくる前に、この作品は現代フラ

ンスにおける移民事情の一面を非常によく表しており、たとえば日本では「黒人」と一言で片づけてしまう傾向があるが、アフリカ系とカリブ系は対立しやすいこと、子供の教育には民族性よりも家庭環境（特に親の関心度）が大きく影響すること、自分の居住区以外の地区を知ることが移民の子供の将来を広げることなど、学生にとって様々な「未知のフランス」の側面を学ぶことのできる教材であり、その解説にも時間を割いたことを付け加えておきたい。

4. まとめ

先述の小林他（2014: 190）によると、授業で映画を活用する際、重要なのはその計画性（「何を教えるか」よりも「どのように学ばせるか」）と学習者の主体性を促す工夫であるという。筆者自身、初の試みであったため、「何を教えるか」を整理するのに追われ、「どのように学ばせるか」はその時々で判断し、対応していた。

しかし、映画の課題あるいは授業での質疑応答で学生が率直に意見を表明してくれたおかげで、回を追うごとに発展していき、『パリ20区…』は3本目であったが、4本目の『憎しみ』、5本目の『サンバ』と進むにつれ、映画の内容に対する学生の観察力や分析力、または関連情報のリサーチ内容など、明らかに進展が見られた。

とはいえ、やはり15回の講義のみでは「異文化間理解」には遠い。6本目の映画「*Qu'est-ce qu'on a fait au Bon Dieu?*」で、「あれほど拒否反応を示した両親が、最終的には四女の結婚を心から祝うに至る。この二人の心の変化についてどう思うか？また、あの拒絶反応は何だったのか？」との問いには、

「(婿になる男性が) 性格がいいとわかったから」

「(自分とは異なる) 人種や宗教に対する“食わず嫌い” だったのでは」

という回答が散見している。異人種間・異宗教間などにはびこる偏見や差別の深さ・難しさを認識し、「異文化適応力」というグローバル人材としての基礎を身につけるには、言語運用能力と同様の位置づけで、1年時から計画的・継続的な異文化間教育の対策が必要である。

最後に、提出された課題等を論文の資料として活用することを快く了承してくれた学生の皆さんに感謝の意を述べたい。

注 (URLは2015年3月27日現在)

- 1 グローバル人材育成委員会はいくまでもビジネスに役立つ人材育性に主眼が置かれているため、文部科学省の「グローバル人材育成推進事業」とは観点が異なる。(大木, 2014: 61)
- 2 大木 (2014: 60) より抜粋。
- 3 詳しくは竹本 (2010) を参照されたい。
- 4 Peter Van Ham, “The Rise of the Brad State— The Post Modern Politics of Image and Reputation”, in *Foreign Affairs*, September/October, 2001
<http://www.foreignaffairs.com/articles/57229/peter-van-ham/the-rise-of-the-brand-state>
- 5 1月8日に発生した女性警察官殺害事件を含めると、犠牲者は17人である。
- 6 一般に“Antillais”と呼ばれるカリブ系の黒人にも差別はあるが、その多くはフランスの海外県出身 (= フランス国籍保持者) であり、アフリカからの移民とは様々な面で異なる。
- 7 本稿で扱う映画の概略はすべて「映画データベース allcinema」および“Allo Ciné”を参照かつ加筆したものである。
Allcinema <http://www.allcinema.net/prog/index2.php>
Allo Ciné <http://www.allocine.fr/>
- 8 『アンクル・トムの小屋』(原題: Uncle Tom’s Cabin) は1852年にアメリカで発行されたハリエット・ピーチャー・ストウの小説。また、“Uncle Tom”は英語で「白人に媚を売る黒人」「白人に従順な黒人」という軽蔑的な形容にも使われる。
参照: Merriam Webster (オンライン辞書)

<http://www.merriam-webster.com/dictionary/uncle%20tom>

参考文献

- 青木保 (2003). 『多文化世界』 岩波新書
- 上瀬由美子 (2002). 『ステレオタイプの社会心理学——偏見の解消に向けて——』 サイエンス社
- 大木充 (2014). 「グローバル人材育成政策と大学人の良識」 西山教行・平畑奈美 (編著) 『グローバル人材再考』 (pp.48-79) くろしお出版
- 小林忠資・寺田佳孝・中井俊樹 (2014). 「大学における映画を活用した授業の特徴——国内外の授業実践論文の比較分析——」 名古屋大学高等教育研究センター (編) 『名古屋高等教育研究』 第14号, 177-194 名古屋大学高等教育研究センター
- 坂田桐子「選好や行動の男女差はどのように生じるか—性別職域分離を説明する社会心理学の視点」『日本労働研究雑誌』2014年7月号 No.648号 94-104. 独立行政法人 労働政策研究・研修機構
- 竹本江梨 (2010). 「テレビの中のフランスおよびフランス語圏——放送翻訳に見る番組制作の傾向と学生の意識——」 名古屋外国語大学外国語学部 紀要第38号, 123-145.
- 萩原滋 (2007). 「大学生のメディア利用と外国認識」 慶応義塾大学 メディア・コミュニケーション研究所 紀要No.56, 5-33.
- 平林博 (2008). 『フランスに学ぶ国家ブランド』 朝日新書
- 細川英雄 (1997). 「言語習得における〈文化〉の意味について」 早稲田大学日本語研究教育センター 紀要9号 1-19.
- Dubois, R. (2012). *Les Noirs dans le cinéma français*. Lille : The Book Edition.

オンライン文献 (URLは2015年3月27日現在)

goo ランキング「フランスと言えば思い浮かぶもの」

http://ranking.goo.ne.jp/ranking/category/011/france_spot/

NHK 連続テレビ小説『マッサン』

<http://www.nhk.or.jp/massan/outline/index.html>

The Japan Times : “Blondes have more fun in NHK’s morning drama”

<http://www.japantimes.co.jp/news/2014/10/25/national/media-national/blondes-fun-nhks-morning-drama>